

武蔵野日曜集会

霊肉渾然 (一)

——ヨハネ伝第6章41～71節——

1984年5月13日 (武蔵野)

小池辰雄

父ひき給わずば 父の選び 霊肉渾然とはキリストのこと 生命のパン 霊的生命の世界 聖
霊のパプテスマ わが言は霊なり生命なり 最後の晩餐 霊受説 汝らもまた去らんとするが
霊法は渾然として一つにする

【ヨハネ6・41～71】

41ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴² 呟ささやきて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降り」と言うか』⁴³ イエス答えて言い給う『なんじら呟ささやき合うな、⁴⁴ 我を遣つかしし父ひき給わずば、誰も我に來きたること能わず、我これを終の日に甦よみがえらすべし。⁴⁵ 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶ これは父を見し者ありとにあらざ、ただ神よりの者のみ父を見たり。⁴⁷ 誠に誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠とこしえの生命をもつ。⁴⁸ 我は生命のパンなり。⁴⁹ 汝らの先祖は荒野にてマナを食くいしが死にたり。⁵⁰ 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹ 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』⁵² ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』⁵³ イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食くわす、その血を飲まずば、汝らに生命なし。⁵⁴ わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦よみがえらすべし。⁵⁵ それわが肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。⁵⁶ わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷ 活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくう者も我によりて活くべし。⁵⁸ 天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらざ、此のパンを食うものは永遠に活きん』⁵⁹ 此等のことはイエス、カペナウムにて教うるとき、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰ 弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚はなだしき言なるかな、



誰か能く聴き得べき』⁶¹ イエス弟子たちの之に就きてきこを自ら知りて言い給う『このことは汝らを蹟かするか。⁶² さらば人の子の原居りし所に昇るを見ば如何。』⁶³ 活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。⁶⁴ されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』 イエス初より信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。⁶⁵ 斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

⁶⁶ ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。⁶⁷ イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』⁶⁸ シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。⁶⁹ 又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』⁷⁰ イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』⁷¹ イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

●父ひき給わずば

⁴¹ ここにユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言い給いしにより、⁴² 呟きて言う『これはヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今「われは天より降りし」と言うか』

ここに「父母」という言い方があるのは非常に珍しいですね。ヨセフのことが書いてある。こういう質問が出るわけですよ、全然、次元がちがうものですから。

⁴³ イエス答えて言い給う『なんじら呟き合うな、⁴⁴ 我を遣しし父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず、我これを終の日に甦えらすべし。⁴⁵ 預言者たちの書に「彼らみな神に教えられん」と録されたり。すべて父より聴きて学びし者は我にきたる。⁴⁶ これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。

「ただ神よりの者のみ父を見たり」とはもちろんご自分のことです。

⁴⁷ 誠に誠に、なんじらに告ぐ、信ずる者は永遠の生命をもつ。⁴⁸ 我は生命のパンなり。⁴⁹ 汝らの先祖は荒野にてマナを食いしが死にたり。⁵⁰ 天より降るパンは、食う者をして死ぬる事なからしむるなり。⁵¹ 我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

まあ、不思議な言葉です。非常に断定的にキリストはものを言つてらっしゃる。この前のところにも、



「³⁵イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渴くことなし。』(ヨハネ6・35)」

と書いてある。お釈迦さんはこのような言い方はしない。何といっても、仏教の方は概していうと悟りの世界です。この福音の世界は悟りではない。本ものを受けとる世界です。

ただここでもって、

「父ひき給わずば、誰も我に来ること能わず」

とある。これは困ってしまうですね。

「神さまが執り成してくださらなければ、私のところに来ることができない」

と。キリスト抜きに神さまが執り成すという。さあ困ってしまった。けれども、これは非常に深い内容です。そんなことはやっぱり普通の註解書には書いてない。パウロはこういうものの言い方はしない。パウロにおいては聖霊が執り成しだから。キリストは、

「父が執り成さなければ」

と、聖霊の代わりに「父が」と仰るわけです。聖霊は「助け主」という、執り成しの霊だから。

「父が執り成してくださらなければ、私のところには来れない」

と。まだこれは聖霊が本当に降っていないときですからね。キリストはもちろん聖霊の人ですけれども。

ユダヤの預言者たち、預言者や祭司——本当の預言者も、本当の祭司も——これはみんな直接啓示の世界です。即ち、

「エホバかく言い給う」

と言う。キリストがやがて執り成しの霊を天界からくだす。今度は天界のキリスト自身が執り成して、そして聖霊をくだしてくれるわけですが、旧約ではエホバが直接に預言者に来ている。そういうような本当の祭司は、サムエルみたいな祭司は非常に少ないけれども、これはエホバの直接啓示です。

●父の選び

「父が執り成す」

という。「父が引き給わずば」というのは——一人びとりがみんな、我々は造られたものです、信ずると信じないにかかわらず。それが、特に執り成すのは、選びがかかっている——

「父に選ばれた者でなければ」

という意味のことだよ。

「父の選びにかかった者でなければ、私のところには来れない」

と。選びの側は、選びはどのようにしてこれが選ばれるかは、これは分からない。我々の側の資格ではないですから。放蕩息子が選ばれるかもしれないし、何が選ばれるか分から



ない。そういうことが、

「父ひき給わずば」

ということです。

それでは、誰でも行けないではないかと。そうなんですよ。その人は神秘的な選びの中に入っている。あなた方はみんな選ばれている人たちなんです。選ばなければ、私が言っているとおかしいけれども、この集会には来ないと言つてもいいようなくらいだ、キリストの言い方から言えばね。

「呼ばれる者は多いけれども、しかし、本当に選ばれる者は少ない」

という言い方もあります。終りの方でキリストが言っているよ、

「去らんとするか。ああ、去るなら去つていいよ」

と。そういうように選びというものは確かにあるんです。これはカルビンの選びの神学もありますけれども。

「我は哀れまんとする者を哀れみ、頑なにせんと思ふ者を頑なにする」

という、恐ろしい言葉まである。こういう言葉があるから、福音は躓きになる。「キリスト教というのはおかしい。何が万人救済か」なんて。そういう非常にドラマチックな構造を持っている。しかも、話は少し先に進んでしまうけれども、キリストの十字架の救いは、これは絶対無条件ですから、選ばれようが、選ばれまいが。それをもなお受けないとなつたら、これはもうお終いなんです。

だから、選ばれた者は今度は、他の人を助ける、救う使命を負わされる。

「選ばれた。救われた。おしまい」

ではない。そんな救いは本当の救いではない。救われるということは、他を今度は救うということ。救われることは人を救うこと。これは離すことができない。伝道されたら、自分伝道せざるを得ない。人に伝えざるを得ない。それが即ち、選びの内実です。救われることは人を救うことであります。もし、人を救わなければ、それは救われたことから落ちてしまう。そういうようにして、伝えざるを得ない。

「^{ひび}呟いて言う」

とある。この呟きというのはいかん。よく、預言者が何か言っていると、呟く。キリストが言っていると。使徒たちが言っていると、呟く。けれども、しばらく、選びは、選ばれたなんていうことはちつとも自分には分からない。これは本当に救われてみると、

「ああ選ばれた」

と分かる。「拾つてくださった」ということだよ、選ばれたとは。本当に救われてみると、

「やつぱり、これは拾つてくださった。こっち側の何ものでもなかった」

と。選びとは一方的です。こっち側に資格があるから選ばれたなんて思ったら、そんなものはダメです。資格のない者、ダメなやつを、ゴミみたいな者を拾つて、そして光を当て



ると、そのゴミが光る。そういうのがこの選びです。

自由をはきちがえているのが日本だ。これまた困ったものだ。本当の自由を知ろうと思つたら、ルターを読めと言いたくなる。ルターが本当の自由を開示してくれたんだから。その前はもちろん、聖書のパウロです。

「御霊のあるところに自由あり」

と。キリスト自身こそ自由たるひとですから。それは神に完全に依存していると、本当の天衣無縫的な自由になるわけです。

●霊肉渾然とはキリストのこと

なぜ、キリストは、

「生命のパン、生命のパン」

と、こんなことを繰り返して仰るか。非常にヨハネ伝6章というのは大事なところですよ。キリストは生命に、神さまの生命に溢れてしょうがない。この生命をどうしてくれか、というのがキリストなんです。キリストの霊と肉は渾然としている。霊肉渾然とはキリストのことですよ。キリストの霊と肉は渾然として生命に満ちている。

「どこが霊で、どこが肉だ」

ではない。全存在が霊的生命に満ちているから、

「私は霊生の、霊的生命のパンだ」

と。これは霊の生命なんだ。肉は肉でないです、キリストは。霊肉なんです。いきなり天界に行ける。いきなり霊化してしまう。だから、変貌の山で光輝いてしまったではないですか。十字架で殺されたつて、どつこいというわけだ。それで、甦つてきた。甦つてきたとは本当の霊肉渾然たる姿が顕れた。地上にあった今までよりもっと凄い霊的状态に入っている。だから、みんなが戸を閉じている所に入ってきた。びつくりしてしまつたんだよ、使徒たちは。

「私は幽霊じゃないぞ。何か食べるものがあるか」

と、キリストはお魚があつたから食べた。ルカ伝に書いてある。こんなことは大体、誰も信じません。神学者たちが笑つたよ、

「こんなことがあるか。これは宗教物語だ」

なんて。それで私はそのグループから出てしまった。私はバカだから、聖書に書いてあるからそのまま信じてしまふ。そのまま信ずると、そのまま受けとると、何かしらんが、凄い力が入ってくる。これが私の信仰の秘訣なんです。

「そういうことがあるでしょうか？」

なんて、何とでも議論してください。私は議論しないから。私の神学はそういう神学なんだ。こつち側は何もない。だから、「無の神学」と言っている。



「私には何もありません。そうしたら、キリストの無限無量の霊でも、知恵でも、光でも、愛でも何でもやって来ます」

と言う。こんな簡単なことを、なぜ、皆さんは難しくしているんですか。

あまり難しく、もう分からなくなったら、どうぞこの集会から出て行ってください、構わないから。私は最後に一人になった方がいい。まあ乱暴なことを言います、私は正直、本当の世界だから。

●生命のパン

キリストは、

「私は生命のパンだ」

と言われる。もうキリストにしがみついていなくてはダメだよ、こんなことを言われたら。かじりついてもいい。「活けるパンだ」と言ったら、キリストに食らいがかつたらいい。

「マナ」は、「これは何だ」ということ。出エジプト記に出ている。モーセが荒野を渡っていたときに、「食べ物が無い」と言ってみんな呟いた。あそこにも「呟く」と書いてあるよ。それを食べてしのいだと書いてある。あれは一時しのぎだ。

ところが、私という生命のパンを食べるものは、これは永遠に死なない。

「死んでも生きる」

なんていうわけだ。

⁵¹我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。

我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』

「世の生命のために」だってさ。

⁵²ここにユダヤ人、たがいに争いて言う

議論を始めた。

『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』

なぜ、そんなことができるかと。バカな問答をするわけだ。

⁵³イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、

この「食う」という字は特別な字で、「よく味わう」という字なんです。肉をよく味わわないで、

その血を飲まずば、汝らに生命なし。

今度は、血まで出てきた。骨まで出てきたっていいよ、書いてないけど。アダムは、イブが出来てきたときに、

「これは我が骨の骨、肉の肉」

と言ったでしょ。アダム、イブの創造のところ、創世記2章23節です。

「²²エホバ神 アダムより取りたる肋骨^{あばらばね}を以て女を成^{つく}り之をアダムの所に携^{つれ}きたりたまえり。²³アダム言いけるは此^{これ}こそわが骨の骨わが肉の肉なれ、此は男



より取りたる者なれば之を女と名くべしと。」(創世記2・22～23)

「男より取りたれば女」と言つたのは、ヘブライ語では、「男」(イーシュ)という字の語尾をちよつと変えると「女」(イッシャー)という字になるから。「アー」という語尾がつくと「女」になる。

「イーシュだから、これをイッシャーと言う」と。

「わが骨の骨、わが肉の肉」

と、これが一番短い、旧約聖書の最初の詩なんです。「人類の母語は詩である」という言葉がある。エバのことをそう言つたわけだ。

今度は、キリストですよ、ここは。

「自分は生命のパンだから、私を食らわなければダメだよ」

と。お釈迦さんはそんなことは言わない。キリストはこういうことをはつきり仰る。だから、「わが肉を食らえ、わが血を飲め、わが骨をしゃぶれ」

と。「しゃぶれ」とまでは言わなかったけれどもさ。それくらい自分は、全存在は生命そのものである。だから、いいですか、私たちがキリストに向かって、

「あなたは私の肉の肉、血の血、骨の骨です」

とはつきり言えるようにならなければダメなんです。また、キリストの方からは、

「お前は私の肉の肉、血の血、骨の骨だ」

と。救われたときには、そういう絶対恩寵の言葉がかかってくる。

●霊的生命の世界

「死なないよ。死んでも死なないよ」

と。福音の世界はそういう盛んなる生命の世界です。そうなってきたらば、何かしらんけれども、霊肉渾然たる事態が感ぜられてくるでしょうが。

パウロが、

「神に付けるものは霊であり、この世に付けるものは肉である」

と言つた、あの霊肉とはこの場合は違います。混同しないでくださいよ。クリスチャンは「肉」という言葉を非常に何かさげすむところがある。けれども、本当の意味では、肉はそういった霊的生命の世界です、キリストの肉は。彼は甦つて霊体として顕れた。だから、我々の肉体もそういう意味においては粗末にしてはいかん。神さまのものだ。神有なんだ。神のものである。

「外なる人は日に日に崩れていくけれども、内なる人は日々新たに新たなり」

という、「内なる人」というのは、「内なる霊肉の世界」ということです。「霊」もこれは聖霊における霊ですよ、もちろん。人間の構造は、「霊・魂・心・体」でできている。生まれ



つきにも霊的なものがある。ギリシア語でもヘブライ語でもみんなこういう言葉がある。そういう考え方というのはやっぱり似ているんだね。

ところが、ここで言っている「霊」というのは、聖霊の、神の霊ですから。そうすると、我々は霊肉渾然です。もちろん、この霊に上の霊がかかってくる。聖霊がここにかかってくる。

「生まれつきの霊がある。しかし、それだけではダメだ、キリストの霊を受けとらなくては」

とパウロが言っているとおりの。コリント前書2章に書いてある。

ユダヤ人は、

「なんだこの人は。肉を食らって血を飲まなければなんて、とんでもないことを言うが、どうしてそんなことができるか」

と言つて問答しているわけです。

⁵⁴わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。

自分の霊肉は地上でもつて——キリストは十字架にかかってから甦ったでしょ——渾然とした霊肉体として彼は甦れたでしょ。

「そのようにお前たちもしてやるよ」

ということなんです、「甦えらすべし」とは。

⁵⁵それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。⁵⁶わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。⁵⁷活ける父の我をつかわし、
我の父によりて活くるごとく、我をくろう者も我によりて活くべし。⁵⁸天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、

「天より降りしパンは」とは、「自分は」ということですね。

此のパンを食うものは永遠に活きん」

「このパンなる私を食らうものは永遠に生きる」

と繰り返している。

私はよくこの頃、本を読んでいるうちに瞑想に入ってしまう。そうすると、読んでいる時間よりか瞑想の方が長くなる。瞑想に入ると、本以上のことがそこに展開してくる。もうありがたくてしょうがない。まあキリストというひとは本当に驚くべきひとですね。

●聖霊のバプテスマ

だから、こないだ書いたでしょ。『エン・クリスト』17号の「八十路の峠を迎えて」というこの一文は大事な文章ですから、時々読んでくださいよ。

「これは先生のこと、こっちはまだ80歳になるまでは読まなくなつていい」
なんて、そうじゃない。今、読んでいただきたい。



「文学作品を景観に譬えらんとするならば、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『樂園喪失』、ダンテの『神曲』、藤井武の『羔の婚姻』はいづれも壮大、雄渾、壮美なるもの、私の魂を感動させて余りある景観で、生涯をかけて愛読するであろう。しかし唯一の例外者がある。それはわが全存在を圧倒するものである。曰く、聖書！……ところでこの聖書に圧倒されるようになった峠があった。それは大阿蘇の深山幽谷にある瀧見荘に於ける集会であった。一九五〇年の晩秋十一月三日から五日にかけての深い白熱的な聖書集会であった。……そのときに私は私としての未曾有の体験をした。即ちいきなり天界から聖霊の降臨にあづかった。異言が迸った。全身がみ霊に震撼した。これこそが聖霊のバプテスマであった。聖書のヴェールがとれた。聖書の言の次元がからだで感得されてきた。

全存在で霊肉渾然と感得されてきた。

キリストが「わが言は霊なり生命なり」と言い給っていることがからだで受けとられ出した。意味ではない、現実である。解釈ではない、力の体受である。見られる文字ではない、聞こえてくるひびきである。研究して解るの解らないのではない、身読して圧倒されること、降参することである。かくて私はつきりと預言者や特に使徒たちの次元に入れられた。……キリストのみ霊を受けたからである。これは私の人生の決定的な峠となった。」(曠野の愛社刊、小池辰雄主筆、『エン・クリスト』第17号、1984年2月冬季号)

本当です。これだけの峠はいまだかつてなかった。それから私の後半が始まった。それは聖霊のバプテスマをはっきりと受けたから。

●わが言は霊なり生命なり

⁵⁹ 此等のことはイエス、カペナウムにて教うるとき、会堂にて言い給いしなり。

⁶⁰ 弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、

誰か能く聴き得べき』

誰がこんなことを聴けるかと。それはそうですよ。聖霊がこなかったら、これは分らないですもの、キリストがそんなことを言ったって。「私を食らえ」だの「飲め」だのと。

⁶¹ イエス弟子たちの之に就きて咄くを自ら知りて言い給う

弟子たちだよ。弟子たちも分からのだよ、全く。キリストが選んだ弟子たちもダメなんだ。けれども、

「今はお前たちは分からんけれども、今に私が十字架にかかって、それから天界に行つて聖霊をくだしたら、今度は私が言つたりしたりしたことがみんな分かるぞ」と、はつきり約束していらっしゃるんだ。それまではダメだよと。

『このことは汝らを躓かするか。』



私が、食らえだの飲めだのと言ったのがお前たちを躓かせているかと。

⁶²さらば人の子の原居^{もと}りし所に昇るを見^みば如何^{いか}。

もと居た所、天界に昇るのを見たらばどうなるかねと。

⁶³活^いすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。

この場合の「肉」というのはこの世的な考え方。この世的な考え方では、いくら考えたって、お前たちの考え方は全部それは肉だと言っているんです、キリストは。だから、分からないだ。私の言は霊なんだ、霊の世界で言っている「霊肉」のことなんだと。

「わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり」

と。これは非常に大事です。キリストの言は全部、霊であり生命である。意味ではないぞと。そのまま受けとれと。聖書の言はそうなんです。キリストの言に限らず、パウロでもヨハネでも全部、聖霊に感じてものを言っているんだからね。それは「霊なり生命なり」です。預言者もそうです。いくら「聖書研究会」をやって、ギリシア語だへブライ語だと言って、ほじくったってダメなんだ、霊であり生命であるところに来なかったら。

⁶⁴されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエス初より信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。

大体、キリストには分かっているんだ、誰がこぼれていくか。ユダというやつが自分を裏切る。それもちゃんと見えている。見えているけれども、キリストは避けない。裏切られたまんにする。ユダは偽りの口づけまでした。

⁶⁵斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

だから、さっきのことです。

「父の執り成しをもつて父に選ばれた者でなければ、私のところに来るわけにいかない。来ても、人間的な肉の思いで来た者はみんな脱落していく」

と。ペテロだってそうだよ。キリストが十字架への道を行こうと思ったとき、

「それはよしてください」

と言ったら、

「サタンよ、退け！」

とペテロはキリストに言われた。ペテロは躓いた。そのあとでまたペテロは三度も躓いた。キリストを否んだ。

「三度否むと、その時に鶏が鳴くぞ」

と。その通りだった。



●最後の晩餐

「我を食らい、我を飲め」ということは結局、最後の晩餐と同じことです。最後の晩餐のことは『エン・クリスト』3号に書いてあるからまた読み返してください。『エン・クリスト』に短い文章で書いたのを時々、私の手紙だと思つて読んでください。とにかく、真理は

「ああ、分かった。おしまい」

ではダメなんです。何回も読んで、血となし肉としなければ。ということは、私の文章を血となし肉としてください。

「ああ、先生はこんなことを書いたか」

ではダメだ。

「これはもう私の血となり肉となりましたよ」

と、それが本当の読み方です。私は聖霊でものを書かなかつたら、私はあなた方にこんなことを言わない。けれども、御霊でもつて私は書いているから。単なる感想ではないんだ。そここのところを読みます。

「最後の晩餐

天鐘

『エン・クリスト』創刊号の「足を洗う」は、我らの我執という根源的な罪を贖いとるキリストの十字架の預告であり、その徴であつたわけでした。食が始まると、イエスはこう口を開きました、「まことに汝らに告ぐ、我と共に食する汝らの中の一人、われを売らん」(マルコ一四・一八)。弟子たちは心配して一人一人「私でしょうか」と問いました。するとイエスは、「十二人のうちの一人にて、我と共にパンを鉢に浸す者はそれなり。実に人の子は己につきて録されたる如く逝くなり。…」と(マルコ一四・二〇、二一)。

ユダの裏切り！ およそ人間関係で裏切りが最もいやらしい現象ではないか。人間には誰にも欠点や弱点はある。それでお互いに注意をしたり、時には怒ったり、時には悲しんだりする。これはやむを得ない。しかしお互いに他をゆるし、忍び、信ずるところに信愛関係は続いてゆく。けれども、もしも乙が丙なる第三者に甲のかげ口をしたり、けなしたりすると、そのうちに乙は甲を裏切ることになる。甲は乙をなお信じ、ゆるし、忍んでいるのに、そのようなこの行為を突如受けると甲の心の痛みは言い難きものとなる。裏切るといふ行為は相手の信頼を無視乃至拒否する行為であります。噫、私は聖霊の体験をして使徒的信仰の次元に入つて来たら、多くの先輩、同輩、後輩に棄てられ、遠ざけられました。お気の毒にも、彼らは私を裏切り者としてしているのでしよう。

パウロがユダヤ教からキリストの道に転向したら、「異端の首」といつてアナテマ(呪詛)視されました。裏切りものあつかいにされました。イエス自身が聖霊に導かれて言いつづければ、特にパリサイ的ユダヤ教徒から旧約宗教の裏切り者とされました。



それが十字架への道となったのです。イエスが降誕されたとき、シメオンがイエスのことを「言い逆らいの徴」となると預言したのも正にそのことでした。

ユダの裏切りを見ぬいているイエスは、ユダの心が裏切りの首領サタンに捉われているのを洞見しておられたわけでありました。ねたみ、あらそい、猜疑、誤解、打算、虚偽、奸計等々の悪い心のうごきが裏切りという行為となると思われます。そして裏切られた者を裏切り者とするような根性にまで移ってゆくとは。要するにその底流には自己義認のパリサイ根性があるわけで、キリストが最も非として、「偽善なる学者パリサイ人よ」と叱咤されたものでありました。(マタイ第二十三章)

さて「最後の晩餐」たけなわであったとき、イエスはパンを取り、祝して裂き、弟子たちに与えてこう言われました。「取れ、これはわが体なり」(マルコ)、「取りて食え、わが体なり」(マタイ)、「これは汝らの為に与つる我が体なり、我が記念として之を行え」(ルカ、及コリント前書一一・二四も略同)。

次にイエスは酒杯をとつて謝して弟子たちに与えて言われました、「これは契約のわが血、多くの人の為に流す所のものなり」(マルコ)、「これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦しを得させんとて流す所のものなり」(マタイ)、「この酒杯は、汝らの為に流すわが血によりて立つる新しき契約なり」(ルカ)、「この酒杯は我が血によれる新しき契約なり、飲むごとに我が記念として之をおこなえ」(コリント前書一一・二五)。

以上のキリストの言を聞いて、マタイとマルコは略同じだが、ルカとコリント前書十一章のパウロの紹介がこれとちがひ、教会的なことに気づく。それで「聖餐」(エウカリスティア)としてキリスト教会で「洗礼」(バプテスマ)と共にサクラメント(秘蹟)にしているのは、正にルカ及パウロの言に由ることがわかる。イエスは、マルコとマタイによれば、何も聖礼典として行えなどいわれたのではなく、むしろヨハネ福音書第六章で、イエスが「人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉を喰らい、わが血を飲む者は永遠の生命をもつ、われ終末の日にこれを甦えらすべし。それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。それわが肉を喰らい、わが血を飲む者は、我に居り、我もまた彼に居る」(ヨハネ六・五三～五六)、と言っておられるように、

これは一番大事なところですよ。

「わが血を飲む者は、我に居り、我もまた彼に居る」という。

「我は汝のうちに、汝はわがうちに」

という内在関係です。私という永遠の生命体を、生命のパンを食べれば、

「私はお前のうちに居る、お前は私のうちに在る」



という。まあ最後の結論はもう少し最後の方に残しておきます。

晩餐に当たって、眼の前のパンと葡萄酒を、端的に「私の肉だ」、「私の血だ」と言い、これを具体的に肉体が食べ且つ飲むように、同時に「わが霊肉」「わが霊血」を汝らがたましいで喰らい且つ飲め。かくて永遠の生命を受けよ。これが新契約だ、と言われたわけだと思います。

即ち霊肉渾然とキリストを喰らい且つ飲めなのですが、キリストが十字架の贖罪死を遂げるまでは「最後の晩餐」の本願は成就しませんでした。即ちペンテコステを迎えて初めて聖霊に在ってキリストの血を飲み肉を喰らうことができるようになります。ルター、ツヴィングリ、カルヴァン、カトリックの聖餐論を渾然と飲んでしまうところに矛盾・逆説的真相があると思っています。」「『エン・クリスト』誌第3号、

1981年2月冬季号)

● 霊受説

このことは今度の『聖書の人ルッター』の、「ルッターとツヴィングリ」というところに書いてありますから、それを読んでください。私のは「霊受説」と書いておいた。ルターでもツヴィングリでもカルビンでもない。205頁のところに、化体説と象徴説。「最後の晩餐の真義は霊受説である」と。

「わが言は霊なり生命なり」

という、聖霊をもつて受けとる説、霊受ということをごで私が言ったわけです。

私たちは活けるキリストという霊的実体を、霊の肉であり血であり骨である、これを食らい飲むとは一体どういうことですか。食らい飲むには道がある。十字架という門がある——門構えに十の字を書く——その門を通して、十字架を通して、キリストの中に入る。キリストの中に入ると、この飲む食べるという、そういう世界が、そういう現実が本当になる。

「私はキリストを食べました。キリストを飲みました」

と。最後の晩餐は、実はこの十字架という門を通る。では、十字架という門はどうして通るのか。祈りです。これが祈り入るといふことなんです。十字架を瞑想しながら、その世界に入る。そうすると、向こう側は詩篇23篇の如き緑の牧場、憩いの汀、聖霊の風が吹いているところ。吹いていれば、どこから吹いたっていいよ。必ずそこは聖霊なんだから。どう吹いたって構わない。聖霊の世界です。そうすると、

「なるほど、私はキリストを食べています。飲んでいます」

ということになる。キリストの中へ入ると、

「私はお前のうちに、お前は私のうちに」

というさっきの言がはつきり現実となります。あなた方、こういう集会に来て聴いているうちに、何だかしらんけれども、生命に溢れてきて、



「お腹が空いているのも忘れました、喉が渴いているのも忘れました」

ということになる。もう、そういう本当の現実に入らなかったら、信仰なんて言ったってつまらないよ、本当に。

だから、無教会のは観念信仰、普通の教会もみんな観念信仰、頭の信仰です。悪くはないけれども、それは描かれた月をみて月だと思っているのと同じことだ。本当に空にかかっている月を、自分が水となって、水の中に宿するような見かたをしなかったら、本当に見ているではない。見入るといえるのは、自分がその中に入って、月を宿さなくては。私が画家だったら、そういう現実をグングン書いてみせるけれどもね。満月が森陰の中の深淵に宿っているような絵を書いてごらん。素晴らしいから。それを見るだけでグツときちゃうわ。

田毎の月影というのは一人びとりの中に、月は全面的に入ってくるんです。月はたった一つだけれども、それがたくさん田毎にみんな月が宿っている。葉末の露に月がみんな宿っている。十の露に十分の一宿るのではない。全部、全的に宿っている。キリストは我々一人びとりに全的に宿りたもう。

これは何も「最後の晩餐」なんて言わないで、毎晩の晩餐をやってくださいよ、キリストのご飯をいただくときに、

「これはわが肉なり」

と思つて食べてくださいよ。そうしたら、お豆腐と沢庵と納豆で結構だ。そういう烈々たる魂にならなかつたら、もちませんですよ。

しかし、キリストはもう二度と十字架にかからない。今度はキリストが顕れるときには、羔の怒りとなる。黙示録です。

キリストを食らい飲むというようなことは、最後の晩餐的なことは、なにも私たちは宗教儀式を、そこらのプロテスタントやカトリックがやるようなことはしなくて結構です。あなた方一人びとりが、

「我を食らえ、我を飲め」

のヨハネ伝6章を普段本当にやっていれば、もうそれで結構です。結構どころじゃない。それが一番いい。

● 汝らもまた去らんとするか

66 ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。

と書いてある。十二人の弟子の他にまだ弟子がいたらしいね。キリストと共に歩まなくなつた。あまりキリストが凄いいことを言うものだから。

67 イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』

お前たちも去らんとするかと。とうとう去ってしまったよ。むしろ、女性がキリストに終



りまで、ある数の女性がついて来たようなもんだ。女の人の方が信仰は大体において厚いようだな。男はすぐ頭で判断する。ところが、

「お前たちも去らんとするか」

と。いいよ、去つても。ただし、またお前たちは平伏して戻ってくる。幾人か。それがヨハネ、ペテロ、ヤコブ、この三人。それから、新しくパウロというやつ。これは去るも去らないもない。キリストにひっくり返された。キリストを迫害していたから、去るところの騒ぎではない。キリストを信ずる者を迫害していた。このパウロがひっくり返されて、

「参りました!」

と。それでパウロという驚くべき弟子ができた。ちゃんとキリストは見ているんだ、選別の器として。その代わりパウロは百難に遭っている、御名のゆえに。

我々は温室みたいな環境にいるけれども、それでもまた別な意味の事態があるはずだ。私たちとしてはどこまでも道を人に伝えなければいかん、絶対に。一人びとりが伝道者ですよ。それをしなかったならば、これは天国に往けないよ、人を本当に愛しなかったならば。愛するというのは、可愛がるということではない。本当の救いの道に入れることです。

「いくらやつても、どうも入つて来ません」

と。それは仕方がない。とにかく、それをやらなくてはいいかん。やっていると、逆に今度は迫害されるかもしれない。いいよ、それは。

キリストの、

「汝らもまた去らんとするか」

と、これは深い言葉ですよ。ところが、今度は、一般のキリスト教に対してはキリストは、

「お前たちはまだ本当のところに来ていないね。ダメだよ」

と言われる。それは、

「私の信仰は純粹で純福音だ」

とか言つて、おおいに純粹のつもりでいる。冗談じゃないよ。「純福音」なんて言うなと。福音は無限無量なもので、純もへつたくれもない。こちらがもう無に徹しなければ。「徹する」と言うとは、

「さあ、なかなか私は徹せません」

とすぐそう言う。私は自分で徹しているのではない。徹せしめられているんです、無に。十字架という絶対恩寵が私を無き者に、無者になっている。私は一遍テレビで吠えてみたいね、

「本当の福音はこういうものだぞ」

ということ。そしてもう、いわゆるキリスト教からさんざん悪口言われてみたいね。

無の世界は楽で、これはもう空気みたいだ。楽で、空気で見えない。空気は眼ではわからない。これが空気ですと言つたつて、わからない。空気というのは素晴らしい言葉だ。空であり、もの凄い気なんだ。天の気だ。天気とは素晴らしい言葉だ。ところが、これは



皆さんを、我々を全部囲んでいる。我々の中に、鼻から吸われて入っている。そして、我々の肉体を活かしている。この無なる空気が我々を活かしているではないですか。本当はキリストの霊気、というのが私たちを活かすんだ。それを魂で、全存在で吸わなくては。それが、「我を飲め、我を食らえ」

ということなんです。いいですか。福音書はそんな素晴らしいものですから、福音書を読んだら、もう楽しくしょうがない。「すべし、すべからず」なんて、そんな世界ではないですよ。読みまちがえては困る。キリストは、

「みんな私がさせてやるぞ」

と言う(異言)。そういう世界ですからね。そういう世界にもう入ってしまったら楽しくてしょうがない。

●霊法は渾然として一つにする

⁶⁸ シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。』

⁶⁹ 又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』

ペテロはすぐこういうことを言う。答案は満点だ。答案は満点なんだけれども、彼は満点の答案を書いたけれども、まだこれは本当の世界ではない。これを言った時はいいよ、ペテロは瞬間的には。ところが、

「私はあんなのは知りません」

なんて、キリストを三度否んじやないですか。

何と言つても、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネのこの福音書の一番の焦点は、キリストがエルサレムに入場してからの話です。そして、復活するまで。これはどれにも一番詳しく書いてある。そこはよく読みなさいよ。十字架上の七つの言葉もある。受難劇というけれども、受難ばかりでは困るよ、復活がなければ。甦りのキリストにでつくわさないでどうするか。甦りのキリストでもまだダメだ。本当は、聖霊降臨までやらなければダメなんだ。十字架・復活・聖霊は切ることができない三相一貫の世界です。

⁷⁰ イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の

一人は悪魔なり』⁷¹ イスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、

彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

あとで後悔したつてはじまらない。首をくくって死んじやった。銀30枚でキリストを売ったんだからね。あとからその30枚は投げ捨てたけれども。どうにもならん。まあもの凄いドラマですね、聖書は。

キリストというひとはもの凄い力を持っている。権威を持っている。しかも本当に底なき愛を持っている。福音書というのは素晴らしいね。こんなものは考えたつて書けない。本当にこれは上からの力でもって筆が動いていたんだね。余計なことは書いてないし。文学



としても大変なものです。聖書は最高の文学なんだ。なぜかという、そこには脈々として光が射して、生命が溢れているからです。シェイクスピアだってかなうもんか。ダンテもゲーテも。彼らの文学は全部、聖書から来ている。これは源泉だからね。ドストエフスキーでも、いかなる詩人でも。この源泉にきたらば、あらゆるものがその人を通して展開していく。その人らしいものが展開していく。

あなた方の生涯そのものが、正に活字を越えたところの活ける文字となってください。それは天界に記しるされます。本なんか一つも書かなくなつていい。本を書くやつはバカなんだ、私みたいなのは。第一級の、超一級の人物は本を書かない。キリストも、ソクラテも、孔子も、お釈迦さんも、みんな書かない。彼ら自身が即ち文字である。活現している。これを受けとつた者がやむをえずして書かせられているわけだ。

「やむを得ざるなり」

とパウロが言つたけれども仕方がない、これを伝えるためには。本当は一番いいのは、説教から説教に伝わっていけば一番いい。口伝でもつて。存在から存在へと伝わっていく。人間はそうでしょ。祖父祖母から父母、子、孫、曾孫へとだんだんと生命が伝わっていく。生命の連続なんだ。霊的生命の世界もそのようにして言い伝えられていく。言葉ばかりではないですよ、行為も。全存在でもつて伝えられていく。だから、全存在的な福音的な歩き方をしていれば、福音はたとえ世界中の本が焼けてしまつても、決して焼けません。これは伝わっていきます。生命から生命へ伝わっていきます。世界がひっくり返つて、地球がどうかなつたつて、

「わが言は永遠に亡びず」

とキリストは言われた。

そういう生き生きとした福音の世界を、どうぞ、身体をもつて証してください。身証です。何をなさつてもいい。何をなさつていても結構ですから。それ自身が身証されていく。そうすると、いつぶつ倒れても、

「ハレルヤ、万歳！」

ということ。私もまだまだ簡単に死ぬわけにいかんよ、大事な仕事が残っているから。もちろん、集会はしますよ。けれども、それを自分の命懸けの仕事として取りかかりますから。著作集も出します。けれども、中心はただ一つの詩にあるんです。私は詩の国の人になりますから。詩人なんて言わなくなつていい。詩の国の人。

「先生は夢見ているな」

なんて。夢、夢人。霊夢人、霊的夢の人。

それで、各召団はそれぞれ最も自由に動いてください。それぞれ自由に。御霊に在るときにはいかなる法則もいらん。霊法は本当に渾然として、一つにします。渾然として一つにならないようだったら、まだ本当に聖霊の世界ではないからだ。終わります。

